

シンポジウム開催に至る経過と 日本北方史研究に関する若干の問題

長谷川 成一

一 シンポジウム開催に至る経過

一九八六年七月の函館シンポジウムが終了してから、われわれ北海道・東北史研究会は、次のシンポジウム開催に向けて次の三点にわたる取組を実施した。

1、一九八六年一二月、次期シンポジウムの開催にむけて、弘前市において協議の機会をもち、弘前シンポジウム実行委員会を結成した。実行委員会は、北海道地区六名、弘前地区五名、仙台地区一〇名、東京地区六名の計二七名の研究者でもって構成し発表した。なお代表は田端宏、顧問は大石直正・榎森進、実行委員長は長谷川成一、東京事務局の局長は浪川健治の各氏に決定した。なお開催地の弘前地区は、長谷川成一、斉藤利男、小口雅史、福井敏隆、河西英通の各氏で構成した。

この後、シンポジウムの趣旨に賛同し、運営にご協力いただいた研究者を順次実行委員に委嘱した。これらの委員をもって、開催に向けての事務協議を数回にわたって実施した。また弘前シンポジウムの開催については弘前市の協力を得ることができ、シンポジウムの主催は北海道・東北史研究会、共催は弘前市・弘前市教育委員会とした。

2、弘前シンポジウムの開催に向けて、予備シンポジウムや研究会を左記のように開催し、研究発表と意見の交換をおこなった。活動の概要は、次の通りである。

一九八六年一二月 研究報告 佐々木利和氏「ブザンソン本夷酋列像について」（於

弘前市）

*弘前市内史跡を見学

一九八七年四月 研究報告 斉藤利男氏「北方史研究における若干の問題点」（於

青森市）

*青森県立郷土館を見学

一九八七年七月 白老予備シンポジウム（於北海道白老郡白老町）

講演 田端宏氏『幕末の蝦夷地』

研究報告 天野哲也氏「北方考古学の諸問題——考古学から見た蝦夷——」

菅野文夫氏「八〇年代の北方中世史——論点整理の試み——」

長谷川伸三氏「幕末期西蝦夷地高島場所における現地労働力の存

在形態」

*アイヌ民族博物館の特別展・北方少数民族展を見学

一九八七年一二月 研究報告 入間田宣夫氏「貴種流離譚と北辺の領主達」(於弘前市)

全体として、予備シンポジウムや研究会においては、前近代北方地域における研究史の洗い直しとその研究成果の再吟味を行い、新たな視点を模索した。

3、函館シンポジウムの記録として、一九八八年五月『北からの日本史』を三省堂より刊行した。同書については、村井章介氏が『日本史研究』三一九(一九八九)の「書評と紹介」において内容を詳細に紹介しており、参照されたい。

二 シンポジウムにおけるテーマと問題点

予備シンポジウムや研究会における、実行委員相互の討論の過程で、われわれは次に述べるいろいろな反省、並びに研究史のなかで打開すべき課題や問題関心を共有するにいたった。

まず第一に、われわれがシンポジウムのテーマに掲げ、課題とすることは、まさに今日的な関心に直結することであった。いわゆる「しょっぱい川」津軽海峡をさしはさんだ兩地域の交流——現代では青函交流圏と称しているが——の実態掌握を図り、その歴史像は

いかなる性格をもつものであるのかを見極める。

第二に、いろいろと議論をよんだ、元首相中曽根発言に見える根強い単一民族国家論の克服はいかにして成すべきか。このような問題自身は、まさに今日的な課題としてわれわれが真摯に受け止めなくてはならないと同時に、研究者の側からも学問的に積極的な取り組みがなされなくてはならないと思われるのである。

第三に、「函館シンポジウムにおける反省点としては、「北からの」という表題を掲げたものの、実は中央から北を見ていたのではないか、しかも「民族」をテーマの一つに掲げたにも関わらず、それについて触れるところがほとんどなかったこと、また考古学等を含んだ学際的な視角を持ち得なかったことであった。これらの点を次のシンポジウムにおいて深める必要があるのではないか、等の認識に至った。

これらの反省と問題関心のなかで、弘前シンポジウムにおいて主として議論をしたいと考えた論点は、次の三点であった。

①一九八八年三月に津軽海峡線が開通し、本州と北海道はトンネルを通じて実質的には地続きになった。青森・函館両地域においては、青函交流圏構想が盛んに論議され、現在も継続している。このように新たに形成された現代的な関心も踏まえて、前近代における蝦夷地と北東北地方の交流を、ただたんに交易・交通という問題に限定してしまうのではなく、広い意味での交通・交流体系に視野を拡大して再掌握する必要があるのではないか。換言すれば、「ひと・もの・情報」という観点から前近代における北方地域の交流のあり

かたを、多角的に検討することであった。

②前述の交流の問題を踏まえて地域の人々、国家の辺境に位置付けられた人々に視点を置き、単一民族国家論の見直しを図る。そのさいに異民族問題は、古代・中世の蝦夷論はいうに及ばず、近世にあってもアイヌ民族の問題が近世国家論を考える上で回避できない問題であろう。

③前近代における蝦夷地・北東北の新たな地域史像の再構築を図る。両地域を統一的にとらえる半面、その地域の独自性と地域的特質を検討し、中央からの視点では見えてこない地域史像を構築し、また北方地域史のなかにおける生活史にも可能なかぎり目配りをしてみたい。いい換えると、地域に根差した「北に住む人々の視座」を重視した地域史像の再構築を図り、またそのような地域史研究はいかにあるべきかということも含めて、その手掛かりを模索したい。

以上に掲げた問題関心に基づき、弘前シンポジウムは次のような構成とした。

経過報告・問題提起 長谷川成一

講演 榎森進『海峡をはさむ地域史像——ひと・もの・情報——』

研究報告 菊池俊彦「カムチャツカ出土の十八枚の寛永通宝」

入間田宣夫「中世奥北の自己認識」

浅倉有子「蝦夷認識の形成」

渡辺 信「南羽と蝦夷地」

佐々木利和 「犬祖説話と和夷同祖論の展開」

右の各内容やシンポジウムにおける質疑・討論については、本書所収の各論稿をご覧いただきたい。

三 近年の研究成果と若干の問題点

弘前シンポジウム開催に至る経過と、同シンポジウムにおいてわれわれが掲げた各テーマと課題については、以上に述べたところで、ご理解いただけたと思われる。

近年の北方史研究の成果

さて近年における北方地域史の研究成果について、紙数の関係から簡単な紹介にとどめ、筆者なりの整理を試みることにしたい。なお函館シンポジウムが開催された一九八六年の時点までと、一九八八年五月の『北からの日本史』の刊行に至る時期までの、研究成果と研究史については、榎森進氏の同書にみえる「研究史の整理」がまことに意を尽くしたものになっているので、おおむねそれに譲り是非参照していただきたい。ここでは、それ以降に刊行された列島北方史研究のなかで、注目された研究を紹介したい。『北からの日本史』収載の各論稿については、前述のごとく村井氏の紹介があるのでここでは割愛した。

著書・論文集・史料集の代表的なものをあげるならば、まず第一に、一九八七年を中心

として刊行された『日本の社会史』（岩波書店）に収載された北方史に関する各論文が特筆されるであろう（紙数の関係上、収録論文の内容は割愛する）。そのほか①高橋富雄編『東北古代史の研究』（吉川弘文館、一九八六）、②海保嶺夫『中世の蝦夷地』（吉川弘文館、一九八七）、③榎森進『日本民衆の歴史 アイヌの歴史』（三省堂、一九八七）、④長谷川成一編『北奥地域史の研究』（名著出版、一九八八）、⑤中世東国史研究会編『中世東国史の研究』（東京大学出版会、一九八八）、⑥佐々木孝二編『総合研究 津軽十三湖』（北方新社、一九八八）、⑦山田秀三監修・佐々木利和編『アイヌ語地名資料集成・山川地理取調図』（草風館、一九八八）があり、北海道・北東北の地域に関する研究は、量的に見た場合、その蓄積は他地域と比較して、決して少ないわけではない。

これらの内容について簡単に触れると、古代中世の東国・東北史に関しては、前記①と⑤にあって、他地域の追隨を許さぬ豊かな研究成果が蓄積された。両書は、この後、東北古代・中世史研究を志す者が拠るべき研究として、古典的な位置を確保するであろうし、また今後これらの研究がどのように大成するのか、筆者も楽しみにしている。②は中世から近世に至る蝦夷地・蝦夷に関する概念の変化を明快に跡づけ、中世蝦夷論の一つの到達点を示している。③はアイヌ民族の歴史を通観し、啓蒙的な記述ながらも学問的には質の高い著作であり、同じくアイヌ民族の地名を扱った⑦は、従来入手困難であったアイヌ語の地名関係の論文を集成し、今後のアイヌ民族史研究の入門的な役割を期待できる。④は先に刊行した津軽藩研究の視野を北奥全体に拡大して、幕藩体制下における同地域の各問

題を取り上げる。⑥は、中世の津軽安藤氏が抛ったといわれる津軽十三湖について人文・自然科学の各分野からアプローチした論文と安藤氏に関する基本的な史料を収載する。このほか安東氏に関しては、七宮洋三『津軽秋田安東一族』（新人物往来社、一九八八）が従来の研究を手際よくまとめ、安東氏研究の広がりを感じさせる。

右に掲げた著作に収載されていない一九八八年・一九八九年にかけての論文にあっては、近世では、アイヌ民族論、奥羽仕置、北方問題などに関する研究が目についた。紙数の関係から、各論文の内容にわたる記述はできないので、手引きとして簡単に執筆者を紹介しておく。奥羽仕置に関しては、西沢睦郎・今野真・藤木久志などの各氏により、奥羽仕置に関する新史料の紹介と、仕置の過程の再構成から新たな見解を導き出そうとする試みがなされた。北方問題では江戸幕府の蝦夷地経営に関する、木崎良平・榎森進・田端宏・川上淳の各氏の論稿があり、アイヌ民族の問題を多角的に扱った菊池勇夫氏の一連の論文が目され、善知鳥を媒介にして中世から近世にかけての北奥を論じた浪川健治氏の論文があった。

なお、近年科学研究費などによる報告書の刊行も行われており、『北日本中世史の総合的研究』（東北大学文学部）、『東アジアにおける正統意識の研究』（東北大学教養部）、『文化における「北」』（弘前大学人文学部）など、これらの報告書に今後の研究の広がりや深化の期待される示唆的な論稿が見られたのも収穫であった。

日本北方史研究の若干の問題

近年の国家論に注目した場合、前記『日本の社会史』の編目構成に見るように、境界・辺境からの国家像の見直しが鮮明に掲げられており、従来、辺境・境界と見なされた地域からの国家像の再検討が行われている。

また地域のありかたに目を転じた場合、たとえば前記『日本の社会史Ⅰ』所収の大石直正「東国・東北の自立と『日本国』」にあつて、古代末期から中世にかけての時期という限定はあつても、東国・東北の自立ということがはつきりと論じられているのは注目される。東北中世史研究の基底を成すシンボリズム（これ自体は、東北中世史を理解する上で有効な方法論であることは自明のことである）を克服する手掛かりとなるような、このような地域史像が明確に打ち出されたことは、今後、前述した当該地域の地域史像の再構築という課題を考察する上からも、極めて示唆に富むものであらう。とりわけ前近代の近世東北史、なかでも個別藩政史の枠に陥りがちな東北地方の近世史研究に多くの影響を及ぼすものと思われ、いわゆる「支配の枠組み」論から脱却するためにも、このような視角が、今後求められてこよう。

民族については、最初に触れたように根強い単一民族国家論もあわせた、アイヌ民族には歴史がない等の発言がなされているが、なお現在の研究状況等については、『北からの日本史』にあつて佐々木利和氏が「アイヌ史は成立するのだろうか」という刺激的な論稿を執筆しており、そのなかに問題点が集約されているように思われる。

以上のような問題の所在と研究史を踏まえてみるならば、研究成果にあっては述べたように、東北古代・中世史が中世国家論のなかでさらに内容を豊かにしていくようにみえるのに対し、最近の近世史研究の中で、北海道・東北近世史研究が、正當に（良くも悪くも）評価されていないのではないかと、という危惧の念を抱かされることがある。それは、近年の『史学雑誌』第五号「回顧と展望」号にあって、蝦夷地・松前藩・アイヌ民族に関する研究が対外関係の項に収録されてきたことである。そもそも蝦夷地・松前藩・アイヌ民族の問題は近世国家固有の問題なのであり、国家の内在的なそれとして考察すべきものであることは、北方近世史研究者にとっては自明の事柄である。

古代・中世史にあっては、蝦夷問題は蝦夷論もしくは中世国家論の中に、きちんと位置付けられており、また東アジア外交史のなかにあつて外交問題との絡みのなかで取り上げられている。その点で近世にあってはオランダや朝鮮国、中国など対清外交の関連できちんと取り上げられるのであれば、問題は別であるが、そもそも蝦夷地・アイヌ民族の問題はそのような性格のものではないし、現状では東アジア世界の外交、または北方アジア地域の交易関係に密接に繋がるものとしての位置付けは端緒にいたばかりである。そのような研究状況を無視して、蝦夷地・松前藩・アイヌ民族の文言が論文名に見えると、対外関係の項に追いやってしまうのは、いかなるものであろうか。

しかし右のような認識は、それほど特異なものではないかと思われる。まさに研究者レベルにあってさえ、日本国家が単一民族国家であると潜在的に認識しているか

らこそ（またそのように考えても不思議に思わない状況が次第に作られつつあるのかどうか）、このような位置付けをして怪しまないのではないかとさえ、考えられるのである。やはり蝦夷地・北東北を含めた北日本やアイヌ民族など日本北方史の各問題は、幕藩制国家に包含された地方の地域史・民族史・国家史の観点からとらえられなくてはならないし、そのような視点がなくては、問題の本質に迫ることはおよそ不可能なのではなからうか。まずは研究者のレベルからの、単一民族国家像に対する認識の修正を迫る必要があるのではなからうか。その上で、われわれがまさに今日的課題として取り組んでいる日本北方史研究に対して、研究者の間でしかるべき市民権を得たいものであり、かかる意味からも、このような研究状況に風穴を開けることを、当弘前シンポジウムにおける目標の一つに掲げたのであった。

〔付記〕 本稿は、弘前シンポジウム開催当日の経過報告・問題提起をおこなった際の原稿を元にして、大幅に書き替えたものである。研究史の整理や研究成果の紹介については、筆者の力量不足と紙数の関係もあり、意を尽せぬものとなった。この点をおわびしたい。なお、本稿脱稿後、吉川弘文館より羽下徳彦編『北日本中世史の研究』（一九九〇）が刊行された。収録論文の多くは北方史研究に新たな地平を切り開く斬新な内容であったが、本稿にあってはそれらに言及できなかったことを、おことわりしておく。